

学校統廃合にともなう校名と校歌の変更をめぐる論点

—茨城県大子町における統合事例から—

丹間 康仁*

1. 問題設定

市町村合併を機運として、学校統廃合が全国各地で急速に進められている。茨城県においても例外ではない。図1のとおり、平成期に入ってから県内公立小学校数は、1994～1997年度の594校をピークに、2011年度には559校まで減少した。一方、県内公立中学校数は、2000年度にかけて235校まで微増したものの、2011年度までに3校減少した。茨城県では、小学校の統廃合が先行的に進められているとみられる。

2008年4月、茨城県教育委員会は、「公立小・中学校の適正規模について（指針）～未来の子どもたちのために～」を策定した。この指針は、「学校の適正規模や適正配置については、設置者である市町村がそれぞれの歴史や地域との関わりを考慮しながら主体的に判断すべき」としながらも、小学校は、「全ての学年においてクラス替えが出来ない1学年1学級の学校について、統合を検討すべきである」、中学校は、「クラス替えが出来ない5学級以下の学校について、生徒の教育環境の面から統合や近隣校との学区の見直しを検討すべきである」という県の考え方を明示したものである。これにあわせて、茨城県教育委員会は、2008年8月と2011年3月の二度にわたって、「未来を担う子どもたちのこれからの学校づくりのために」と題するリーフレットを公表した。リーフレットには、県内における学校統廃合の実施事例が紹介された。

学校統廃合が実施されると、歴史を閉じてい

く学校がある一方で、統合先として存続する学校にも、一定の変化が迫られる。たとえ校地や校舎が継承されても、校名の変更をはじめ、校章、校歌、校訓、校旗、制服までもが一新される場合は少なくない。こうしたなかで、本稿では、学校統廃合にともなう変更される校名と校歌に着目する。学校統廃合の実施に際して、第一に、統合先として存続する学校の校名が変更されることの意味を問う。第二に、学校統廃合にともなう新たに作詞・作曲された校歌が、同じ地域で歌い継がれてきた校歌からみて、どのように変質したかを究明する。後者の問いについては、具体的な事例として、茨城県下でも平成期に大規模な学校統廃合が進められた大子町にクローズアップして、そこで実施された統廃合事例を取り上げる。以上に基づいて、学校統廃合にともなう校名と校歌の変更をめぐる検討していくべき論点を導き出す。

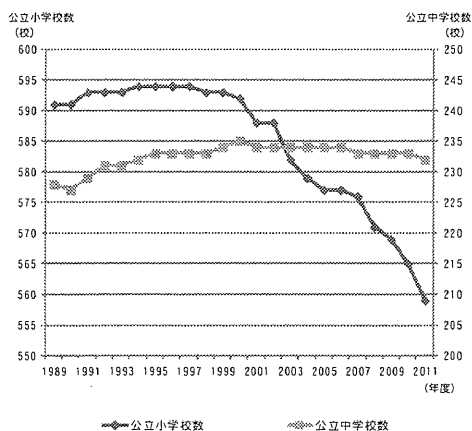


図1 茨城県における公立小中学校数の推移

* 筑波大学大学院博士後期課程3年

(文部省『学校基本調査報告書』平成元年度～平成12年度および文部科学省『学校基本調査報告書』平成13年度～平成23年度に基づき筆者作成)

2. 「新しい学校づくり」としての校名の変更

学校統廃合をめぐる今日的な動向として、公立小中一貫校の相次ぐ新設が挙げられる。この動向は、小中一貫校という「新しい学校づくり」を掲げながら、実質的には学校統廃合を推進していく行政側の戦略として捉えられる¹⁾。行政は、子どもの教育という観点から、小中一貫校の利点や特典を保護者や住民に示しつつ、その具体的な方法として、学校統廃合が必要になると訴えかけていく。「新しい学校づくり」は、今日、行政側が学校統廃合を推進していく際に拠って立つ論理の一つにされていると考えられる。

むろん、「新しい学校づくり」の具体的な方法は、小中一貫校の新設のみに限られない。既存の校地や校舎を活用しつつも、統合校の校名、校章、校歌、校訓、校旗、制服などを一新することで、「新しい学校づくり」を行うことは可能である。近年になって平仮名や片仮名書きの校名が各地でみられるようになった背景には、学校統廃合の推進と抱き合わされた「新しい学校

づくり」の展開をみてとることができる。

例えば、北海道岩見沢市立メープル小学校は、1999年4月、朝日小学校と上志文小学校の統合校として開校した。上志文小学校の校地と校舎を活用した統合校であったが、統合にあたって、図2のとおり校舎が改築された。あわせて、校名、校章、校歌、校旗が変更された。新しい校名には、結果として、この地域の特産品として名高いメープルという名称が選ばれた。メープル小学校の敷地の隅には、図3のとおり、上志文小学校の閉校記念碑が建っている。碑には、上志文小学校の校歌の歌詞が彫られ、歴史を後世に伝えている。

一方、地名に基づいた校名でありながら、漢字による表記を取り止めて、平仮名で表記する例も数多くみられている。茨城県では、図4のとおり、地名を平仮名で表記する公立小学校が続々と現れている。むろん、日立市立大みか小学校のように、「甕」という字が小学校で習得する常用漢字ではないことから仮名書きされている例は除外した。ほかにも、水戸市立三の丸小学校と梅が丘小学校、つくば市立二の宮小学校

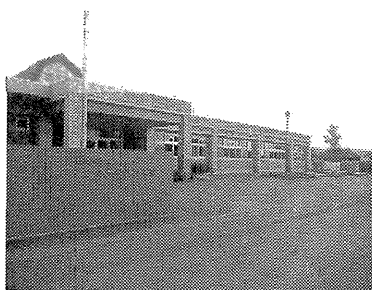


図2 岩見沢市立メープル小学校
(2011年8月20日、筆者撮影)

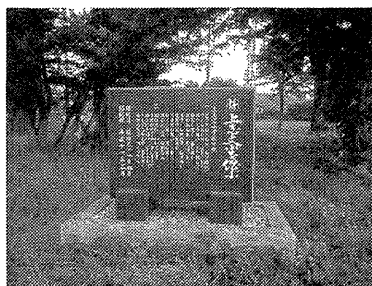


図3 上志文小学校の閉校記念碑
(2011年8月20日、筆者撮影)

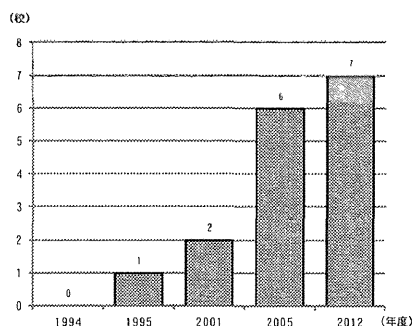


図4 平仮名化した茨城県内の公立小学校数の推移
(茨城県教育委員会『茨城教育便覧』に基づき筆者作成)

表1 平仮名化した茨城県内の公立小学校一覧

設置年度	市町村	校名	地名
1995	大子町	さはら小学校	佐原
2001	大子町	だいが小学校	大子
2005	稲敷市	あずま東小学校	東
		あずま西小学校	
		あずま南小学校	
		あずま北小学校	
2012	河内町	みずほ小学校	瑞穂

(茨城県教育委員会『茨城教育便覧』に基づき筆者作成)

など、地名の単語になかにそもそも平仮名が含まれるものも除外した。これらの例外を除けば、今日みられる平仮名校名の多くは、平成期に入ってから実施された学校統廃合によるものである。表1のとおり、各小学校につけられた校名のルーツを辿れば、大子、佐原、東、瑞穂という旧村名に行き着く。他の地名と比較してみても、読み書きの難易度は決して高くない漢字である。このことから、漢字の難易度とは異なる次元の理由で、校名をあえて平仮名化しなければならなかった経緯があったと考えられる。

3. 茨城県大子町における学校統廃合の経緯

1955年の町村合併によって大子町が発足した当時、町内の小学校数は、本校16校、分校9校であった。その後、1956年4月に、佐原小学校の分校であった初原分校と楨野地分校が分離独立を果たした。その時の両校の児童数は、それぞれ105人と94人であった。さらに、両校とも第1学年から第6学年まで学級があった。分校とはいえ、独立校並みの規模であったといえる。このことから、分校から本校への分離独立に至ったとされる²⁾。これ以降、町内における小学校数に増加はみられていない。

平成期に入って、大子町では、全町的な学校再編計画に基づき、図5のとおり、さはら小学校とだいが小学校という2つの平仮名校名の新しい中核校へ、順次、小規模な小学校を統合していく施策が推進されてきた。

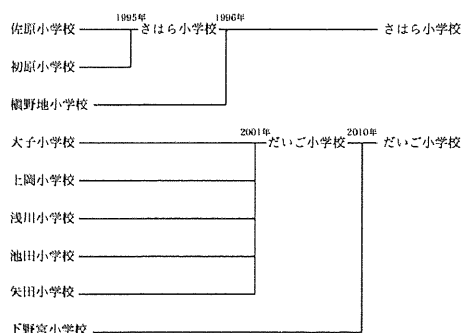


図5 さはら小学校とだいが小学校への統合経緯
(筆者作成)

まず、さはら小学校は、1995年4月、佐原小学校と初原小学校が統合して、佐原小学校の位置に開校した³⁾。その翌年である1996年4月、楨野地小学校がさはら小学校に統合された⁴⁾。結果として計3校がさはら小学校に統合された。

次に、だいが小学校は、2001年4月、大子小学校と上岡小学校と浅川小学校と池田小学校と矢田小学校の計5校が統合して、大子小学校の位置に開校した⁵⁾。その後、2010年4月になって、下野宮小学校がだいが小学校に統合された⁶⁾。結果として計6校がだいが小学校に統合された。

4. 学校統廃合にともなう校歌の変更

4-1. 対等な統合のための校歌変更

大子町で実施されたさはら小学校への3校統合とだいが小学校への6校統合では、図6や図

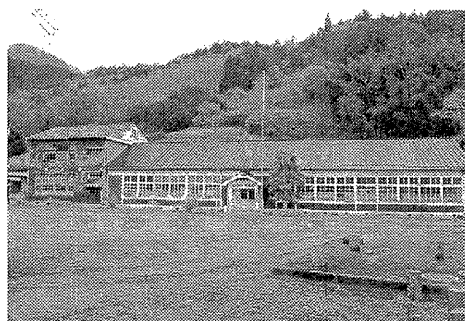


図6 「初原ぼっちの学校」として農作業体験や交流活動の拠点に活用された旧・初原小学校
(2012年2月15日、筆者撮影)

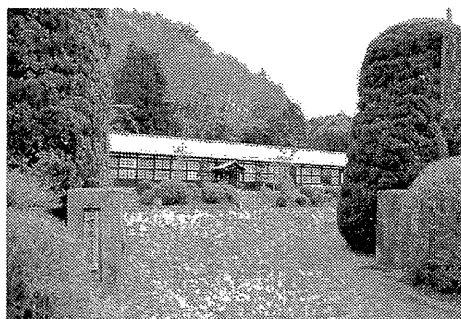


図7 「大子おやき学校」として体験型交流促進施設に活用された旧・楨野地小学校
(2012年2月15日、筆者撮影)

7のように廃校された学校と、かたや、統合先として活用された学校とに分かれた。しかし、実質的に廃校されたか存続されたかに関わらず、計9校の小学校において、いずれも閉校式が実施された。中核となる学校へ規模の小さな学校を吸収するのではなく、あくまでも各校は対等に統合するという姿勢が示されたといえる。これには、学校統廃合を進めていくうえで、地区間での利害対立を避けようという意図がみられる。しかし、実質的にみれば、さはら小学校は佐原小学校の位置から変更なく、また、だいご小学校は太子小学校の校舎をそのまま流用したことに変わりない。こうしたなかで、さはら小学校とだいご小学校では、開校後まもなく、新たな校歌が作詞・作曲された。校名の平仮名化はもちろん、校歌をも新たに見直すことによって、校地の位置や校舎は変わらずとも、「新しい学校づくり」が目指されたといえる。これによって、佐原小学校と太子小学校で歌い継がれてきた校歌が学校行事で公式に歌われることはなくなった。

以下では、統合前の小学校で歌い継がれてきた校歌の歌詞と、統合後の小学校において新たに策定された校歌の歌詞をあわせて検討することによって、校歌がどのように変質したかについて究明する。特に、校歌のなかで歌われている地区の自然と歴史に注目して、学校統廃合にともなう校歌の変化を明らかにする。

4-2. 統合以前の校歌にみる地区の情景

さはら小学校とだいご小学校に統合された計9校の小学校のうち、佐原小学校、榎野地小学校、太子小学校、上岡小学校、浅川小学校、池田小学校、矢田小学校および下野宮小学校の計8校では、校歌の存在が確認された。一方、初原小学校では、校歌が制定された記録を学校の沿革史からは見出せなかった⁷⁾。また、太子町教育委員会を中心に編纂された校歌集の初原小学校のページには、校歌の代わりに、愛唱歌「うたえばんばん」が掲載されていた⁸⁾。これらの記録から、初原小学校については、校歌を持っていなかったと考えられる。

以上を踏まえて、計8校の校歌の歌詞のなかで、地域の自然や歴史が歌われているフレーズを取り出して表2をまとめた。ここでは、地域の自然や歴史が歌われている部分を、山、川、農、社、木という5つの観点から整理した。

太子町の最北端にそびえる八溝山は、標高1022.2メートルで、茨城県の最高峰である。栃木、福島との県境にまたがる。この八溝山は、8校中2校の校歌で歌われた。このほか、山々、山かい、群山、山脈といった抽象名詞も含めると、8校中6校において、八溝山塊をはじめとする周辺の山地一帯が情景として歌われたといえる。八溝山は、太子町はもとより茨城県を代表する山の一つであるが、一方で、「その山並みの起伏が大きいので、八溝山の山容は遠くから

表2 校歌のなかで歌われている自然と歴史

学校名	山	川	農	社	木
佐原小学校	花瓶山	初原川	茶のかおり	花室の宮	杉の緑
榎野地小学校	山々 山かい	久慈川	たりほ稲田		山の木々
太子小学校	群山	久慈川			
上岡小学校	鷹ヶ谷の峯 山々	押川の流れ 久慈川	田畑 日渡のたんぼ		木立
浅川小学校	八溝の山				庭のいちょう
池田小学校	山脈 鏡山	久慈の流れ			松
矢田小学校	八溝おろし	久慈の流れ			
下野宮小学校		御殿川		近津の森	鉾杉

(各校の校歌の歌詞に基づき筆者作成)

はみることではない」⁹⁾と指摘される。太子町内でも場所によっては八溝山の眺望がきかない地区もある。校歌の歌詞に、それぞれの地区と山との関係性が見出されるところである。一方、佐原小学校では花瓶山、上岡小学校では鷹ヶ谷の峰、池田小学校では鏡山が歌われている。八溝山よりも身近な山が、それぞれの地区を象徴する山として位置づけられているといえる。

また、八溝山の北斜面を源流とする久慈川は、八溝山地と阿武隈高地のあいだを南に流れて、最終的には太平洋へと注ぐ一級河川である。久慈川は、8校中5校で描かれている¹⁰⁾。久慈川の全長は124km、流域面積は1,490km²である¹¹⁾。関東平野を流れる代表的な河川の一つで、多くの支流を抱えている。太子町のなかにも久慈川へ注ぐ支流は数多くある。佐原小学校では図8の初原川、上岡小学校では押川という久慈川の各支流が歌詞に組み込まれている。

このほか、小学校やその地区を象徴する場所や事象として、農、社、木の観点から歌詞を分類した。佐原小学校と横野地小学校の校歌から

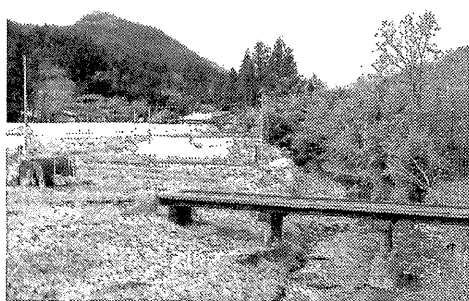


図8 旧・佐原小学校の校歌に歌われた初原川はやや下流で旧・初原小学校の近くを流れ行く
(2012年2月15日、筆者撮影)

は、茶畑や稲作の景観が連想される。上岡小学校の校歌にも田畑という言葉がみられる。さらに、佐原小学校では花室神社、下野宮小学校では近津神社とその鉾杉、浅川小学校では校庭の銀杏が校歌に歌われている。

4-3. 統合後の新校歌にみる地区の情景

以上では、学校統廃合が実施される以前の校歌の歌詞について検討した。以下では、学校統廃合によって、各校でそれぞれ歌われてきた地区の情景が、2つの新たな校歌として、どのように変化したかについて検討する。さはら小学校とだいが小学校で新たに作詞・作曲された校歌について、地区の自然や歴史が歌われているフレーズを取り出して、統合前の各小学校の校歌に照らし合わせた。先と同様に、山、川、農、社、木という5つの観点から整理して、それぞれ表3と表4にまとめた。

さはら小学校、だいが小学校のいずれの統合校においても、久慈川の支流である初原川や押川、八溝山以外の花瓶山や鷹ヶ谷の峰については歌われなくなった。統合前の地区ごとを特徴づけるような狭域の自然については、表現されなくなったといえる。その代わりに、太子町全体を代表するより広域な自然を捉える歌詞へ変質したといえる。そのうえで、以下では、さはら小学校、だいが小学校の各校について、特徴的な変化を取り上げて検討を行う。

第一に、さはら小学校への統合にあたって、新たに作詞・作曲された校歌を次に掲載する。

表3 さはら小学校への統合にともなう校歌の歌詞の変化

	山	川	農	社	木
さはら小学校に統合された各校	花瓶山 山々 山かい	初原川 久慈川	茶のかおり たりほ稲田	花室の宮	杉の緑 山の木々
さはら小学校	久慈の空				

(各校の校歌の歌詞に基づき筆者作成)

さはら小学校 校歌

作詞 星野 徹
作曲 池辺 晋一郎

- 一 ぼくも わたしも
大子子ども
見あげる 久慈の
空いっぱい
希望の鳥を 放そうよ
さあ はばたいてよ
鳥 どこまでも
みんなの さはら小学校
- 二 ぼくも わたしも
地球子ども
国から 国へ
またがるように
平和の虹を 架けようよ
さあ ほほえんでよ
虹 人類に
みんなの さはら小学校
- 三 ぼくも わたしも
宇宙子ども
ささめき 流れる
あの 銀河から
未来の星を つかもうよ
さあ またたいてよ
星 永遠に
みんなの さはら小学校

以上のとおり、さはら小学校の校歌では、「久慈の空」というフレーズを除くと、地区の自然や歴史を表現する言葉はほとんど描かれなくなったという特徴がみられる。例えば、かつて佐原小学校で歌われていた初原川は、そのやや下流で、初原小学校の近くを流れている。しかし、楨野地小学校の近くには、別の支流が流れている。また、佐原小学校の校歌に歌われた「花室の宮」とは、花室神社のことである。しかし、初原小学校の地区には、これとは別に鹿島神社

がある¹²⁾。統合前は、小学校ごとに、地区で親しまれている川や神社が異なっていた。そのため、新しい校歌のなかには、久慈川の支流や神社を組み込むことができなかったと捉えられる。

こうしたなか、「ぼくも わたしも」で始まる各節の冒頭をみていくと、一番では「大子子ども」、二番では「地球子ども」、三番では「宇宙子ども」と展開している。範囲が次第に広がるような描き方が行われている。ここで仮に、歌詞のうち「さはら小学校」という部分を除いてしまえば、一番については、大子町のどの地区で歌われても違和感のない校歌でもあるといえる。さらに、二番と三番については、大子町に限らず、全国各地のあらゆる小学校でも流用しうる内容の校歌にもなる。したがって、さはら小学校の場合、学校統廃合にともなって作詞・作曲された新たな校歌は、統合前の校歌と比べて、学校や地区を特徴づける言葉がほとんど取り除かれているといえる。統合前の校歌にみられた歴史性や地域性は、学校統廃合にともない、結果的には脱臭されたと捉えられる。

第二に、だいが小学校への統合にあたって、校歌に歌われる山が変えられた点は注目される。すなわち、八溝山が歌われなくなった代わりに、男体山が歌われるようになった。これは、新たな通学区域に、八溝山を眺望できない場所が含まれることとなったからであると考えられる。

男体山は、久慈山地を代表する標高653.9mの山である¹³⁾。高さこそ劣れども、八溝山とともに、大子町の名所とされている。しかし、だいが小学校からみたとき、八溝山は北西寄りの

表4 だいが小学校への統合にともなう校歌の歌詞の変化

	山	川	農	社	木
だいが小学校に 統合された各校	八溝の山 八溝おろし 鷹ヶ谷の峯 鏡山 群山 山々 山脈	久慈川 久慈の流れ 押川の流れ 御蔵川	田畑 日渡のたんぼ	近津の森	木立 庭のいちょう 松 針杉
だいが小学校	男体山	久慈川 清水	りんごの風		けやきつ子 大けやき

(各校の校歌の歌詞に基づき筆者作成)

方角にあるのに対して、男体山は南東寄りの方角にある。そのため、2つの山は、だいが小学校を中心に、ほぼ反対側の方角に位置するといえる。校歌に歌われている山を学校から眺めるときの方角は、学校統廃合の実施によって、180°近く転回することになったと捉えられる。

さらに、だいが小学校の校庭東側には、茨城県の天然記念物として指定されている「文武館跡のケヤキ」がある。このけやきが、統合後の校歌のなかで、新たに歌われるようになった。むろん、このけやきは、統合前から大子小学校を象徴する巨樹であったが、以前の校歌には歌われていなかった。校歌の変更に際して、だいが小学校の新しい象徴として、「大けやき」が位置づけられたといえる。あわせて、だいが小学校の児童たちは、「けやきっ子」という愛称で歌われるようになった。

また、農産物として、りんごが歌詞に取り入れられた。大子町では、近年、りんごが町の特産品の一つとなっている。大子町におけるりんごの栽培は、1944年3月に旧・生瀬村で試植されたのが起源とされ、大子町での栽培の歴史は、どちらかといえば浅い¹⁴⁾。ゆえに、だいが小学校へ統合される以前の7校の校歌には、いずれもりんごは歌われていなかった。しかし、現在では、町内に数多くの観光りんご園があつて、たくさんの観光客を受け入れる秋の名所となっている。したがって、だいが小学校への統合では、校歌の変更にあわせて、大子町の新たな特産品が歌詞に取り入れられたといえる。

5. 校名と校歌の変更をめぐる論点

5-1. 校名の変更をめぐる論点

学校統廃合にともなう校名や校歌が変更される理由の一つには、廃校となった地区の住民や保護者が、統合先の学校に「新しい学校づくり」を望んでいるという背景がある。しかし、そうした住民や保護者の要望が、統合校での「新しい学校づくり」にどれほど反映されたかについては、変化の内実には踏み込んだ検討が必要に

なるといえる。

校名の変更については、決して読み書きの難易度が高いとはいえない漢字の地名が、学校統廃合にともなう平仮名化されていく動きを確認できた。漢字であった既存の校名をそのまま平仮名化することによって、校名の読み方を変えないままに、校名の表記のみを変えることが可能である。学校統廃合を実施するにあたって、統合校においては、これまでの学校の歴史性や地域性を引き継ぎながらも、ある程度それらを脱臭することが外側から要求される。こうした二面性の狭間にあつて、校名の平仮名化は、地区間での合意形成が揺れた結果の一つの着地点として捉えられる。

かつて民俗学者の柳田國男は、『地名の研究』のなかで、地名とは「要するに二人以上の人の間に共同に使用せらるゝ符號である」¹⁵⁾と定義した。その後、地名学の研究は、市町村合併をはじめ、新住居表示、圃場整備、区画整理、国土調査など、行政と関わるさまざまな分野において、安易な地名の改変が行われてきたことに批判を投げかけてきた。「公権力による上からの強制的地名改変は、地名一般の自然発生的な変化、生成消滅とは同一に論ずるわけにはいかない」¹⁶⁾として、地名が変わることはあつても、地名を変えることについては留保を加えてきた。

とりわけ、2011年3月11日、東北地方を中心とする太平洋沿岸の広い範囲に被害をもたらした「平成三陸大津波」以降、災害地名学に関心が集まっている¹⁷⁾。津波の常襲地をはじめ、地名には、災害の記録が刻まれている。災害地名学は、先祖がその土地について遺したメッセージを地名から読み解き、その結果を防災に役立てる。その際に、地名の漢字を和語としての言葉の意味に戻して理解するアプローチが採られることもある¹⁸⁾。しかし、市町村合併や学校統廃合によって地名を平仮名に変えていく動きの根源は、和語への意味に立ち返ることを意図した動きとは異なる次元にある。平仮名化する合併市町や統合校の新名称は、和語への立ち返りとは別の次元で、合併市町村間、統合地区間での利害調整に一定の落としどころを見出すため

の方法論的な思考から生じたものに過ぎない。

以上のことから、学校統廃合をめぐる地区間での利害調整の方法として、地名や校名を単に公募や投票という手法に頼って改変することは避けなければならないといえる。ここではむしろ、統合を決めた地区の人々が、次のステップとして、地名史に関する学習を進めながら、地名や校名に関する議論を地域全体に巻き起こしていく過程こそが求められる。これまで永らく継承されてきた地名や校名に込められているメッセージの意味を学んだうえで、その理解を前提にして、今度は現世を生きる人々が後世にメッセージを遺していくという学びの循環と蓄積が求められる。校名の変更を、単なる学校統廃合の実施条件の一つとして捉えるのではなく、そこで生活する人々が地名史に関する学習を進展させながら自分たちの地名や校名のあり方を議論していくという、いわば、住民の地域計画づくりにおける相互学習の過程として位置づけていくことが重要になると考えられる。

5-2. 校歌の変更をめぐる論点

校名の変更とともに、内実として大きな変化をみせたのは、校歌であった。校歌は、「その学校全体を象徴し、学校行事などで所属感や一体感を醸成するためにうたう歌」¹⁹⁾、また、「その学校全体を象徴し、児童生徒の道徳性や情操を養ったり、所属感や一体感を醸成したりするために、学校行事等において日本語で歌われる洋楽系の短い唱歌」²⁰⁾と定義される。したがって、学校統廃合によって校歌を変更すれば、歌を媒介に地区で培われてきた学校の象徴性や共通性は、その変更を境にして、新たに塗り替えられていくものと考えられる。

これまで、校歌をめぐっては、教育学はもちろん、地理学や建築学の領域からも多角的に研究が進められてきた。校歌の持つ教育的機能や意味を解明する研究のほか²¹⁾、校歌の分析を通してその土地の地理や景観の特徴を明らかにする研究が取り組まれてきた²²⁾。

しかし、学校統廃合にともなって、校歌が変更されているという動向に焦点をあてて、校歌

がどのような変質を遂げたか明らかにする研究は、未だ十分には深められていない。本稿はそうした動向を捉えて萌芽的な研究を行ったものであった。以下には、学校統廃合にともなう校歌の変更をめぐって、議論の余地が残されていると考えられる点を4点掲げることとする。

第一に、学校統廃合にともなって、校歌が変更されるに至った過程の究明である。これについては、廃校となる地区の住民と統合先となる地区の住民とのあいだで議論になる場合が少なくない。そのため、地区間での利害対立が生じる場合もみられる。こうしたなかで、新しい校歌づくりをめぐる住民どうしの話し合いがどのように行われたかについて、当時の話し合いの記録を辿って解明していくことが求められる。

第二に、これまで校歌の作詞や作曲は、母校の卒業生、地元の出身者、学校の教師が主に担っていた。しかし、学校統廃合をめぐって地区間で利害対立がみられる場合、いずれの地区であれ、卒業生や出身者や教師に新たな校歌の作詞や作曲を任せることは難しい。それがかえって地区間の対立を煽る要因にもなりかねないからである。こうしたなかで、第三者としての立場である詩人や音楽家に作詞と作曲を依頼する事例が、少なからずみられている。しかし、地域には、そこで生活する土着の人々のあいだで共有されている日常の文化や史実がある。それらを他の地域で生活する第三者が短期間に受け止めて描くことは、決して容易な作業ではない。したがって、新たな校歌の作詞者や作曲者がどのような観点で選ばれたのかという点についてはもちろん、一方で、依頼を受けた作詞者や作曲者が地域の文化や史実についての理解をどのような方法や工夫によって深めたかという点について、検討していくことが求められる。

第三に、新たな校歌の指導上の課題についてである。学校統廃合が実施されると、児童・生徒にとっては、通学する学校をはじめ、学習環境が大きく変化する。校歌の変更もその一つとなる。これまで歌ってきた校歌とは異なる新たな校歌を児童・生徒に指導する際、教師はいかなる配慮をしていたのかについて明らかにする

ことが必要である。なかでも校歌は、音楽科、社会科、生活科、国語科など、領域横断的な性格を持った教材と捉えられる。こうしたなかで、新たな校歌の指導上の課題や方法について知見を共有していくことが求められよう。

第四に、地域において校歌が変更されることの意味を究明することである。学校統廃合にともなう校歌の変更によって、統合前から歌い継がれてきた校歌は、少なくとも、正式な学校行事では歌われなくなる。とはいえ、地区で生活する卒業生の多くは、かつての校歌を記憶に留めている。そこで、統合以前の地区を単位として引き続き開催されている地域の行事や祭事に着目して、そうした場で、かつての校歌がどのように継承されているかという現状について究明していく必要がある。

6. おわりに

学校統廃合によって地域から学校が失われることは、「単に校舎建物の損失ということのみではなく、長い歴史に培われ、地域住民の心に潜む心のふるさと、地方文化の抹殺にも通じる」²³⁾と指摘される。このように、学校統廃合の実施が地域に与える影響は既に懸念されている。しかし、ここでは、心のふるさとの喪失や地方文化の抹殺ということの意味を、実際に地域で起きている具体的な変化の次元に掘り下げて検証していくことが求められる。

平成の市町村合併を機運とした学校統廃合によって、地域でいかなる具体的な変化が起きているかについて、校名や校歌を手がかりとした検証を進めていく。

注

¹⁾ 山本由美編『小中一貫教育を検証する』花伝社、2010年。

²⁾ 大子町史編さん委員会編『大子町史 通史編 下巻』大子町、1993年、pp.640-646。

³⁾ 閉校記念事業記念誌委員会編『佐原小学校閉校記念誌 茶の里』大子町立佐原小学校閉校記念事業実行委員会、1995年。大子町立初原小学校閉校記念事業推進委員会閉校記念誌編集委員会編『初原小学校閉校記念誌はつばら』大子町立初原小学校閉校記念事業推進委員会閉校記念誌編集委員会、1995年。

⁴⁾ 大子町立榎野地小学校閉校記念事業推進委員会閉校記念誌編集委員会編『榎野地小学校閉校記念誌まきのち』大子町立榎野地小学校閉校記念事業推進委員会閉校記念誌編集委員会、1996年。

⁵⁾ 大子町立上岡小学校閉校記念事業実行委員会閉校記念誌委員会編『上岡小学校閉校記念誌ふじ』大子町立上岡小学校閉校記念事業実行委員会閉校記念誌委員会、2001年。閉校記念事業記念誌編集委員会編『矢田小学校閉校記念誌えのき』大子町立矢田小学校閉校記念事業推進委員会、2001年。閉校記念事業記念誌制作委員会編『池田小学校閉校記念誌いけだ』大子町立池田小学校閉校記念事業実行委員会、2001年。

⁶⁾ 下野宮小学校閉校記念誌編集委員会編『閉校記念誌 しものみや』下野宮小学校閉校記念誌編集委員会、2010年。

⁷⁾ 大子町立初原小学校閉校記念事業推進委員会閉校記念誌編集委員会編、前掲書、pp.9-10。

⁸⁾ 大子町教育委員会・大子町視聴覚ライブラリー運営委員会編『わが母校校歌集』大子町教育委員会・大子町視聴覚ライブラリー運営委員会、1994年、pp.42-43。

⁹⁾ 大子遊史の会編『大子風土記』大子遊史の会、2005年、p.41。

¹⁰⁾ 校歌で歌われる久慈川については、今橋克寿「小中学校で歌われる久慈川」『久慈川のほとり』久慈川水系環境保全協議会、第4号、1990年が詳しい。

¹¹⁾ いばらきの川紀行編集委員会編『いばらきの川紀行一河川環境管理財団助成事業』いばらきの川紀行編集委員会、2005年、p.8。

¹²⁾ 平凡社編・瀬谷義彦監修『日本歴史地名体系第八巻 茨城県の地名』平凡社、1982年、p.115。

¹³⁾ ふるざといばらきの山編集委員会編『ふるざといばらきの山』茨城県、1990年、p.123。

¹⁴⁾ 大子遊史の会編、前掲書、pp.61-62。

¹⁵⁾ 柳田國男『地名の研究』古今書院、1936年、p.7。

¹⁶⁾ 楠原佑介「地名保存の論理」『言語生活』1979年3月、327号、p.41。

¹⁷⁾ 楠原佑介『この地名が危ない一大地震・大津波があなたの町を襲う』幻冬舎、2011年。

¹⁸⁾ 小川豊『危険地帯がわかる地名』山海堂、1983年。

¹⁹⁾ 朝倉隆太郎『山と校歌—中学校校歌にうたわっている山地—』二宮書店、1999年、p.4。

²⁰⁾ 折原明彦『校歌の風景—中越地区小中校歌論考—増補版』野島出版、2006年、p.6。

²¹⁾ 代表的な研究として、大庭茂美「校歌・校訓・校章の研究」(1996～2004年)や牛島達郎「校歌に関

する調査研究」(2001～2004年)による一連の成果が挙げられるほか、小川隆章・東福寺一郎「校歌が児童・生徒に与える影響—卒業生から見た校歌」『環太平洋大学研究紀要』第4号、2011年、pp.73-80。

²²⁾ 代表的なものとして、矢部恒彦・北原理雄・徳山郁芳「小学校校歌に謳われた全国の地域景観イメージに関する研究」『日本建築学会計画系論文集』第472号、1995年6月、pp.111-122。

²³⁾ 若林敬子『学校統廃合の社会学的研究』御茶の水書房、1999年、p.457。